

## 01-013

## 総合病院におけるディストラクションを活用した抱っこ採血における保護者の反応—チームで行うプレパレーション—

羽場 美穂、倉 愛子、橋本 敦子、河口 祐介、古保 志保

石川県立中央病院 小児病棟

## 【目的】

子どもの権利を擁護した医療提供には、チームが同じ認識を持ち取り組む必要がある。今回、保護者による抱っこ採血と、患児へのディストラクションとして遊びを導入し、医師、看護師、HPS、保育士がチームで行うプレパレーションについての効果を検証した。

## 【方法】

保護者へのアンケート調査。属性や過去の医療体験、抱っこ採血の方法に基づく「抱っこ採血前の保護者の印象【認識】」、「抱っこ採血の準備【準備】」、「抱っこ採血中の子どもの様子【採血】」、「抱っこ採血後の関わり【後援】」、「抱っこ採血後の保護者の印象【評価】」の各段階の質問項目に対し、「すごくそう思う～全くそう思わない」の4段階で回答、理由は自由記載とした。本研究はA病院倫理審査委員会の承認を得て施行した。

## 【結果】

「採血と一緒にできてよかった」は、「そう思う・すごくそう思う」が93%、「安心してできた」は、「そう思う・すごくそう思う」が88.4%であった。また、各段階をスコア化し、相関係数はスピアマンの順位相関係数とし検定を行った。各間について、認識と採血( $r=0.33$ )、準備と採血( $r=0.33$ )、準備と評価( $r=0.42$ )、採血と後援( $r=0.37$ )、採血と評価( $r=0.45$ )、後援と評価( $r=0.31$ )で相関を認めた。

## 【考察】

「採血と一緒にできてよかった」「安心してできた」の回答から、児の処置を知り、一緒に経験できた事が安心感に繋がっていた。スコア間の関連、【認識】と【採血】では、採血前に「子どもは暴れる」等の負の思いを抱く場合も、患児の苦痛を受け止める決心へ繋がっていた。【準備】と【採血】では、採血前の病院スタッフとの関係が良好の場合、採血中の関わりを好意的に受け止める傾向にあった。【準備】と【評価】では、採血前の関わりが十分であり、患児の心の準備が整うまで病院スタッフが待つ事が好意的な評価に繋がっていた。【採血】と【後援】では、採血中の患児の様子や遊びを好意的に受け止めた保護者は、後援も好意的に捉えていた。【採血】と【評価】では、採血中の不安が少なく遊びの効果を感じた保護者は、抱っこ採血に対し好意的に捉えていた。【後援】と【評価】では、後援が良いと感じた保護者は、抱っこ採血を好意的に受け止めると推察された。以上より、保護者もチームの一員として参加し、医師、看護師、保育士が協力した取り組みは、プレパレーションの質を高め、患児や親の対処能力を引き出すことができた。

## 01-014

## 唾液アミラーゼ測定を用いた重度重複障害児の意思の推定

菊池 直実<sup>1</sup>、伊藤 史人<sup>2</sup>、佐々木 美香<sup>3</sup><sup>1</sup>岩手県立盛岡青松支援学校<sup>2</sup>島根大学<sup>3</sup>もりおかこども病院

新生児医療や救命救急医療の技術的進歩により、重度・重複障害のある児童生徒は近年増加傾向にあり、「障害の重度・重複化、多様化」が進んでいる。児童生徒は、特別支援学校において自立活動を主とする教育課程で学び、長期入院中の児童生徒は、ベッドサイド学習中心の訪問教育を受けている。運動表出が乏しく、健康面・身体面に不安定であることから、コミュニケーションや身体活動に課題を抱えている。

## 【対象者】

7歳男児、低酸素性虚血性脳症、人工呼吸器を使用

## 【目的】

対象者は、長期入院中のためベッドサイド学習中心の訪問教育を受けているが、外部刺激に対して反応に乏しく学習効果等が確認できない。そのため、実態に応じた授業内容への改善を図れるよう、授業内容が適切であるかどうかを検討する一助として、ストレス状態を計測して授業内容への反応を推定する。

## 【方法】

ニプロ社製アミラーゼモニターにより、2018年9月～12月の35日分の訪問授業において、授業項目[授業開始前、朝の会、手足マッサージ、全身マッサージ、音楽活動(楽器を触るなどの身体接触あり)、絵本の読み聞かせ、音楽鑑賞(抱っこスピーカーによる振動あり)]毎(約5～15分)に測定した。アミラーゼ活性値の高い授業項目については授業内容の検討が必要と判断し、アミラーゼ活性値の低い項目に対しては好む活動と判断する。全測定回数は219回である。

## 【結果】

アミラーゼ活性値は、「エンサウンド社製抱っこスピーカーによる音楽鑑賞」を終えた直後では顕著に低い傾向であった。一方、「絵本の読み聞かせ」を終えた後では、高い値を示す回が多く見られた。筋緊張が見られ授業者が不安を感じていた「マッサージ」においては、さほど高い値を示さなかった。湿度とアミラーゼ活性値の関係に着目すると、湿度の低い期間において、高くなる傾向が見られた。

## 【考察】

これらの結果より、唾液アミラーゼ測定を用いた重度・重複障害児のストレス推定は、日によって測定結果に差があるものの、傾向を示すことができると言える。対象者が心理的に安定して取り組むことができる内容を明らかにすることで、授業内容の改善を図ることができると思う。